

地方の建築が面白い

東北大学大学院
工学研究科教授

五十嵐 太郎



Taro Igarashi

渡航できなくなった一年

去年はコロナ禍によって、月中旬にニューヨークを訪れて以降、全く海外に出かけていない。本来はキュレーションを担当したフランスの「Grand La Forme Paris」が「Windowology:窓学」展の海外巡回、インドネシアの国際シンポジウムなど、幾つも予定があった。しかし、延期された後に開催されたものの、現地の感染状況が悪化して渡航を中止したり、オンラインの開催に変更されたりするなど、国内に踏みとまらざるをえなかった。筆者は卒業旅行で海外に行くことが珍しくなくなった一九八〇年代に大学生だったから、これほど渡航が少

留学生や、海外に留学中の日本人の学生も簡単に参加できる。対面なら不可能だ。逆に近隣の学生と直接会えないことを踏まえると、遠くが近くに、近くが遠くに、という距離感のねじれが印象的だった。

ないのはおよそ三〇年ぶりである。一方で、去年は別のかたちで海外が近くなった。一気にリモート化が進み、研究室のゼミも前期はすべてオンラインで開催したが、一時帰国して日本に再入国できなくなっていた

ともあれ、海外に行けなくなった分、去年は日本の地方都市を回ることにした。実際、地方には、訪問しようと思いつながら、後回しにしていた多くの名建築が残っている。また美術館や劇場が閉鎖している期間には、近所を散歩する機会が増え、あまり気づいていなかった場所を発見することも少なくなかった。すなわち、コロナ禍は期せずして、我々のリアルな足元を見つめ直す時間をもたらしたのである。グローバルズムを受けて、世界各地の大都市では、華やかなアイコン建築が次々と誕生していたが、すぐにコロナ禍が収束しない場合、デザインの動向も変化するだろう。またコロナ禍が終焉したとしても、一度体験したリモート化の波が消えることはない。したがって、オフィスや住宅のあり方も、以前

と同じままではないだろう。「アフターコロナの世界」というアイデア。コンペの審査委員長を務めたが、床が余ったオフィスをどうするか、あるいは住宅地に非住宅の機能を付加するなど、多くの作品がビルディングタイプの再編を提案していたことは興味深い。

地方に増える注目すべき建築

さて、去年は改めて地方都市に魅力的な現代建築が多いことを再確



4階までの壁と床を抜いた白井屋ホテルの吹き抜け

認した。青木淳氏・西澤徹夫氏による「京都市京セラ美術館」、田根剛氏の「弘前れんが倉庫美術館」、藤本壮介氏の「白井屋ホテル」、㈱日建設計の「ザ・タワーホテル・ナゴヤ」などが挙げられる。特筆すべきは、リノベーションが目立っていたこと。ヨーロッパでは当たり前のリノベーションが、日本の建築界では、バブル崩壊後から住宅や小さな店舗などで注目を集め、ようやく公共施設やホテルでも本格的なプロジェクトが登場したのではないか。筆者は二〇二〇年度のグッドデザイン賞の審査委員を務めたが、建築ユニットで選んだ作品から、更に全体のベスト一〇〇にまで入賞した七件のうち、実に六件が地方だった。例えば、乾久美子氏の「延岡駅周辺整備プロジェクト」のほか、(有)オンサイト計画設計事務所による多治見駅前の「虎渓用水広場」、㈱日本設計の「熊本城見学特別通路」などである。数年前から、東京よりも地方の建築のほうが面白くなっていると感じていたが、その想いをますます強

くした。近年の日本建築学会賞も、こうした傾向を裏付けている。こうした傾向を裏付けている。**東京は盛り上がっているのか？**
本来、オリンピック・パラリンピックが開催されるはずだった二〇二〇年の東京は、再開発が目白押しで、建築がもつと盛り上がるはずだった。しかし、一般メディアは話題として取り上げたかもしれないが、革新的なデザインのプロジェクは意外に少なかったように思う。そもそも、拙著『建築の東京』みずが書房、二〇二〇年）で指摘したように、伊東豊雄氏、(有)SANA A事務所、坂茂氏など、プリツカー賞を受賞した複数の建築家が東京に事務所を持つにもかかわらず、彼らの代表作は東京に存在しない。海外や地方から依頼され、現地で優れた建築をつくる優れた世界最高レベルの才能が、お膝元の東京で発揮されない状況は、端的に言って、もったいではないか。もちろん、東京は地価が高く、経済原理が強いために、野

心的なデザインを導入しにくい。一方、地方は空間の使い方に余裕があり、危機感をもった自治体は積極的に新しいプロジェクトに取り組む。もともと、ニューヨークのようなグローバル都市でも、階段のお化けのような新名所「ヴェッセル」が登場したので、東京は単に実験的な建築に対して、目立つと叩かれることを恐れ、消極的なものかもしれない。東京は建設ラッシュが続くから、イケていると慢心してはいないだろうか。しかし、筆者の目には、いまの東京がもはや冒険を忘れ、東京を真似していた地方都市の拡大版のように見えてしまう。逆に東京を真似しない地方都市には、独自の建築が生まれている。が、コロナ禍を受けて、東京でもオフィスや商業施設に席数や店舗をぎゅうぎゅうに詰め込む開発の必要がなくなり、経済原理が支配しない空間をデザインできるようなになったら、現在の状況は変わるかもしれない。本来、東京にはもつと底力があるはずだから、それを生かすべきである。